四書考義一覽

下

ホ 2
734
之止

利門 734 巻 ろ

明治三十年 五月十日 購求

助辭本義一覽下卷

本書本義考は此除ものるゆあり。そ始めて。そ。初學はほどの人彼頭捕抄。五の緒。八千種等とはじめ。うた。類れ書をなそ。さらもぐのことをはじめ。をかゞ。奇にはよるもどいとゆ。ゆ。れ。て彼書どゆ。ふ出のせる品格がもせいよくの。ゆ。れ。間。ゆ。ら。れ。人のゆ。ゆ。ものあるいとも。あゆ。ゆ。れ。る。奇どもの中ゆ。ゆ。ゆ。

集は貫之のよれさくもるごとくにふたりの人合せ其数三十餘種もあるべれども一人千枚して見る時は二十種に過ぐるべからず千枚に相互に入れかはるべつもてもあり百首に九十餘首までハ同じもくよめる同じてにをはどのみにて異なるいとて集中にわづかに七八首にて其格々一首又ハ二首にて又ゆゑを掛るばかり也外の人々ハ皆くのごとくにそもれてこれへべかりけれ故に古は書どもと撰ばれし人々ハ此とうハとを詠やうくにかりてきにかりて數萬の歌ハ中ちいとまなくなるとなり其中に出てしられたる人々ハ一人ハ一人ハ一人

かゝわるまで、をもゝくゝゝゝ

などのぞめのをとりかへて、下知するをあらぎるるわし。凡ての辞ども、皆此
でうを以て心得て、君の切目続く三のくらゐとよくわつぶむべきなり。
狂言の三十三段より以下、二番となれる稚どものも、文を示さべし。
さくに又ともわるるものあるは、是より下の受辭どもを、多く一音に解な
る中にも、妹うと此三番の活き辞を解て、雖く、諭さに言ふとくとく
ふくし、そを世とくへば、活くべきを既にうとし、つきべくれと活くべき
辞をうぶ、うれ、もべれ、うれ、れ、れと活くべき辞をうれば、
居て、そもそもの本義又他ら番じる所、父子では穿うびとも、事れる
さを別るゞ世多くなほきをわたをやくるものいられ、ものるれ
る再るをのそみ付るを、て適、其言のをを、もうぐをと教
をるにをしの説も、異さちて、ちをるをいく、まうしかをを教ふ

ひるるをあれをの多れば、ちりとての、ほつのでるを。味
うをもをびかるををるの説んとをることを難義なれば、十二六七ま
では、本義より論しくれ安くなりゆくものあるとちをて。
彼説だらんせぬ歌をもおりてやるをそれの中にも、此沙段
の辞ことを、ほるをぐれて再疎うるぐくををれ、れど学びの方ゑざ
しあん人を、打つけるをひをつをの勿れ、人の見識とをるを、時に
動くるものありて、今年ひをを、而を来まれ見とも教みぐるしふを打をる
ちどはと承うげある説ども、年経てのちををれのふをびあと
をひなりゆくるを、誰ら身みも堂多るるをひなりゆくるびも
顧みて後をつぐよりををてをう。

きうてうし　きうてうき　れうれ　てうれ

此は所謂きゝ換るもの也かく直ゝきに換るもの仮希ゝ是別となるもあれど
彼紐鏡ゝ出せる諸どもの中ゝてゝぐし・のぐし・むし・うし・はし
などの如く・なさ・のぐさ・むさ・うさ・つさ・とゝにさゝも法くもの也
さ行は通音ゆゑ・さそせと古事記上巻ゝ宇都志伎青人草之落苦瀬
時用を
而患惚時とある瀬・又萬葉六ゝ山乃曽伎野之衣寸見世常とゝある曽伎
の曽なども是也・此等の瀬も曽伎も物の際界と云語ゝて中古の奇ゝられ
ゝき漸・うれゝき漸・あま漸などゝある・喜き際界・哀き際界・逢ゝ際界
涯ゝのゝ也・河ゝ淀瀬・迅瀬など云瀬も本ハ水脉ゝ・涼さ・浅さなと云ふ
の通音ゆゑ共ゝ其際界涯ゝと云言なるゆゑ一ッの名となれる也・後世の人は
ゝき漸・逢漸などゝ云漸と却て河などゝ縁語とのみ思ふめれど然
ゝは非ず・古奇に川などに寄せてゝよみゝる也・只其奇のもゝてのみ
也・河の縁語ならで只何となくいへる・奇にも文ゝも多う見ゆと
後世は・西行の奇にもゝなうずともゝく〻と流ゝせん時島山田は

亦の杉は村主・此ほどの奇ゝも・有あるべし・かくて右の辞どもの外ゝも下ゝさを添て云語也・行ゝて
多ゝれどそゝれゝゝさ・ひゝゝゝさ・たのゝゝさなどゆゝふもゝどの外ゝ別ゝさも
添ゝて直ゝもの言ゝ換格と八元ゝ異なり・但さの言の上は他ゝ離れて別
小添はるもゝ・うゝとゝ陸界・あゝと思ゝ陸界・ゆゝと思ゝ陸界・ゆゝの上よ
て・皆同ゝなれどゝ八語格の別あるゝと云也・さて此等のもの中段ゝ何の格
ゝてきゝ結ぶゝて結ぶゝるも彼曽伎と曽伎敝とも云伎敝の約れる也・大方帯
語も・上の言は活くと・下の言は活くとある・例多きゝ也・彼重れる神社の
脇木を・上を活ゝして氷木と・下を活ゝして千木とも云類のもし
万葉十七ゝ山河乃曽伎敝乎登保美・同十九ゝ天雲能曽伎敝能伎波美などある
是也・又下段ゝ・こゝの格ゝてもゝれと結ぶ・此れも・右の伎敝のきは通音ゝて活きゝる
此段のもゝ稀ゝ別ゝとなるゝもあるゝと云ハ・べし・なるゝなどのもゝ也・足ゝ同くきゝ
もゝ・此ハ為の義也・さゝ・右の詞どもの〻くさゝと仕法うぶる也かくて此の中

段まてきとうるそ来の義也そそ物の成就を出来といひ又万葉ニ久と法う
まてくもくもくも

言ふて受くる語勢とみたりてもいふこと言葉と音そて味ひ自の
ずて及ぶべきなどてはなくちづかべくるつ。

以上二段は現在の辭。下三段は過去の辭ども也。回しもどしても義のうる
ものはうつるなり。次の教ぐとうる考へもわるべし。

第三段

き　ありき　えき

此きは既の義也。ありきは在既。見きは見既。きしは聞既。知りは
知既のまとめて即在既見既聞既知既とうんほどの意なり。中段のしは
去の義也。サリの反。去のまと云言の例と一つなり。往去経。ゆく
しゝ向去也。向とは天要之向伏限なと云類又故むかしくしと云それ
も向去経也。西し日往去の上略也。死も去往なり。退し去辭の義也。此等
の合せて考べし。これは此のあしは在去。ゆくは見去。きしは聞去。ゆ

又は知去のまとめて是又在去見去聞去知去といふんなるし。但し去といへば
辭。ゆくは續く辭なるは。歌用の差別也。彼の詳きは本書にて見べ
き也。下段はもうはうそとは既のきの通音にて法らるる也。

此處上の初段はもき。これ二段のもき。これ此三段のき。もは皆上もとき
入うけるは現在過去はもらはは誰もるるくはたくに絡るくきとそくく本
つまるは解ることにて云いと定うて耳まつはりて文を絡て方なくまり法る
きはつくは本義とはるくくれて。つまとはとはたくはは此中段のもは
あてこそと受ける例と擧ぐ。

後八
まもりぐくもきみはまもりぐくもきれとまふりてこそ
拾遺長守
ホとりつきこの君とあふうは人をめとこそ
新後撰八
わくふこそふくもきしは凡の神まれぬるしの世き

凡十三

[illegible]

結びてもそれ[illegible]

[illegible]

古四

[illegible]

拾十六

[illegible]

円十

[illegible]

[illegible]の格にて右の經脈を挙げる辭中に出れば必ず出をぐるもあらねど

[illegible]の受[illegible]を終に重み見べき故もあれば[illegible]

[illegible]

[illegible]を廻りて[illegible]

第四段　ふきて　[illegible]　ふし　[illegible]

[illegible]

[illegible]

第五段　てき　てい　てし

てきて・竟既の義也。て詞の例はべてもも・竟し・てんも・竟む・てくも・竟くん
べもも・竟ま・べ〜ぐれも・竟し・うる・てくもも・竟くちのを也。後撰三に、かく
なぐらちらで世をやそはくてれ花のときはあちをるぐ」はてれ。ふる
はるくき河のやうなるを。本義に反して竟往ををる時を是こと之うに
ちゆ。うれぐ〜のいひしきは言竟既。ひしてきを思竟既べとうてきは漆竟
既。べをてきを懸竟既のを也。中段のてを例の竟去の義をて。べてし言竟
去。べはりべてを。思竟去。べをて。漆竟去。べうもてを懸竟去つを也。

第六段　ぬ　ね

此不の言はをを。さ行の音は中。空為不と互に反對して義と合てれば茲に
この三義と合せて解べし。先ッそとうて。空きをの一條ちうをを神代紀に。諸

完空國。まる曾尸茂梨之處なぐある共に荒蕪。不毛れ。物無き地をとうて。虛
空も。空をの言。虛言の曾も。空ーー言れ謂。又万葉十四東哥に。べれぐ〜の
岡に雲ゐるきぐれきぐ駒をなぐ〜に和波素登毛波白。此結句を。我を曾
も思ハ〜とをるく。曾を馬に追却声也。今世に。禽獸などを追ふ。シ
イとゑも。此曾の訛れる也。
十三卷に。べをて鈴とをに。呉犬追馬鐘と書をるも。曾とをて。却掃をあるが
故也。溫濕。禊ぐも。拔ひ流ーー却也。その音に。棄。洗濯。清ぐの義も准ふ
べし。古事記上卷の奇に。曾陀多岐とあるも。素手抱の也。記傳の釈は非
芦荻抄に弁じ置ッ。さて曾ハ。素字音りハあらず。元よりの古言を
るぐ〜に適ニ字音ゐも。相應ぐる也。自紀ーて。死氣等のたぐひ也。
書紀に。徒跣。徒手なを訓ニ。古本今昔に素手も書をり。神代紀に。空手来
帰〜あるぐ〜て。素手は素も。空きをなををりちし。今世の言も素肌。
素鎗。素布子。素飯なぐ云。是等合せて。曾の言はをとちをりてを。さて

物と為作そ本其物の無きて就て為作するわざなれば君のそとそに
指ずて言時そ即為すわざなる也爲へハ色そ白の虚無なるそ本なるそ染
し後青赤黒等はて色をそしゆくと同じわざ也かくて 紋 纐 撈 繞 總 維
仮合の類も為と元ててふ詞又下に附て任寄 遣 起 神 指 載 失なども
為とて活のしる詞ども也又古の音にて知領識効験標結縛示の類
も皆同じ也数悉くいくも而せられば他ハ省り是元そ五十音十行の中齒の音
そかい行とはそ行とのこ也そ活のにて牙齒と動うそハ人の身體にて四肢
と動ものくなれば物と行為そ物のては專此二行のみとして活う
しいてりそ中にこの行ハ才は音なりられハ多くそ人の所行の方にゆきつ
そ下の四段と行の音そ活ノ為言方にのみなるときにくく思
ふそ青耀はそれくき義にるる事、あるてて神変不測奇くあや

ものなるうれかくてはまとそこに濁りそ用ふ名数にてはそのそ也
即此不のつまり伊ふと強てとそこそ也と濁りそ用ふ名数にてはそのそ也
と濁りそ反対せる名と別也又乃そ名にはる也せるなるものどは是あの約ハこ
ごりの平ぜざと相通ふべきうてはある也中段のぬそ無の約りせそそ
ぬてもそなくるはぬてもそなるこ也れるくはくるは後なるぬるのそなるう
やし下段のはハ無の約りなり言利と約るこそそれハ人そそれるれ
こそきこそれハ人にて古れるれのそなるるて初べし又古今集のうる
もるるかふ右の不のことでもこ云て不見不聞るべるるの多しこそ万
葉ハ前にそ古そもるかりそるもう古學者侮りて不而の器結也
訛也なるべるべ其誤りなし今京のこのみはべるべ其語の主にる不と濁りし他
つよりてなるるべしとそ思られず四詞既に古言中にに有とのはゆ
るやしわれどそハよく定てのち

べしと思ふ事あれども其の格れ祢の通音也されば其績くるもねとつる
格と全く同じくあるべしあるべしなるべしなるべしなるべしなるべし
なるべしなるべしなるべしな

みぐるれのくきこそなぐしもとれとあべきこそもれ。あらこそ行幸(ミユキ)して
するゆと行幸そう日記とそうすゆと日記してけぐゆのあてて。そうゆと
ものそる方こそもりて。つくる詞ぐもなり。

第九段　なる　ふまり　なくる　つくる　なれ　つくれ　なくれ

なり(ニアリ)ハ尓在(ニアリ)なるそ尓在(ニアリ)なれハ尓在(ニアリ)の約れる辞也。あらこの中ハ半こそ約るも
歟。こそ。誰も也れるゆもれどかく活つのでるそいくべしもえあるもの。さて
此辞の恒こ弟三の弱の連く言ちり受て。切こ活ちけうげるも即なの
言こ尓と帯とる故也。又彩姿二ふ。わづやどのるりなぐらさくく云
ちるとばえくてかくめぐりれ。此このなりまぐくこそけぐきのこ上を
再をきゆるゆと。物尓在(ニアリ)随(カラ)と本音と加てこれバいと定うるり。又此
なりを。ねつゆなぐるり。なてなるねるり。ゆねるる尓。なつなると。

第十段　なる　まるせる　たる　ふるせる　たれ　ふるせれ

半こそ。而有(テアリ)半こそ。而有(テアル)半れハ。而有の約まる辞也。されバおるせる
そ。在而有(ニアリテアリ)こそ。籠而有(コメテアリ)ハ。得而有(セテアリ)。浮而
有(アリ)なり。たる。たれ。准ふべし。此段の辞としての言くはしく弟二の弱と弟四の弱くるる
続きて。弟三の弱なぐるりそ。しぐけぐるも。世の言く而と帯とる故也。
さてかくこと上段とも徒れ言そて。推て知るべき辞ども。中段下段の
歌ぐるそ。ぐる省ぐり。下れくなるく。

第十一段　けり　咲く　結ぶ　　けるる　咲く　結ぶ　　けれ　咲く　結ぶ

此段に引る所は往来などの来れ言の活きる辞也されば萬葉にかる詞の多くを来と書き又其来と動うて咲く結ぶや成ぬるぞや

などもよめり紀ふ春者来尓来など同語れ續くもあるを就ていうべも打ふやうなれど下の来を既に辞となれし故に重ねて性ういるべ

きて活の上を石のやく来の活きるなれど彼の結ぶ成ぬ咲くさきぬ

ぶちうちうちうちの数必ずも待来成来咲来増来觸来のこと

のみもあるべし其中の落着治定しるを云辞也又上にあてなべ言

を添ていうもある上ふりを往来てうは竟来也又なりとそくく

きりけるとと續けるを彼の落着れ方うは歌る辞とそなれるなり

且一　きり　少き活のむ所の今まうが高く上そきるぬるうもちるぬ

[illegible]

やくぶちうちうちう

千六

なるみちもまた[illegible]きそで[illegible]松ぐうら島
此歌上句八きるき・きれぬふいうりぬるなど・了解のを越と先ッ[illegible]て・下句
[illegible]と決着しるなれハ・其名ハ・即なりの心也・そを[illegible]の事を・八言
ふうき道ふそきれると・先ッて解してさて此ざと也・[illegible]
ざうくると・決定しる也・又金業の事を・高所ちす梓のるこられ[illegible]
了解して・ちて芦河のめられ[illegible]と・決定しる也・千載の事を・
[illegible]の[illegible]の[illegible]了解して・さて[illegible]
[illegible]と決定しる也・[illegible]と・[illegible]
[illegible]けるとのづけられる也・[illegible]
[illegible]民狭衣著[illegible]は[illegible]
決定の[illegible]也・[illegible]と解[illegible]
[illegible]推量[illegible]

[illegible]ちゃ[illegible]つけ[illegible]ちゃ[illegible]耳[illegible]きゃ[illegible]ん[illegible]も・玄のお義[illegible]ら推・ときハ・元
の正實と失ふ[illegible]し・此[illegible]も・右のやく・其なつと決定の[illegible]なれバ[illegible]
[illegible]ると[illegible]用ひん[illegible]し・[illegible]
[illegible]へ又[illegible]ると[illegible]一路もあり・[illegible]
[illegible]ばふそ[illegible]ると[illegible]了解の
歌[illegible]

第十二段　めるる　めるる　めれ
[illegible]そ[illegible]と同語　メリ・ベラ・上下　共に音通へ[illegible]て・邊の義也・邊ハ[illegible]て海乃
[illegible]と・海邊と云[illegible]し・又殆[illegible]と云[illegible]し・邊[illegible]きの[illegible]也・殆字を
字書に危也・近也・邊也と注せるつ[illegible]て・此[illegible]邊[illegible]を云
即ちなりそ・散邊[illegible]に近ぎ[illegible]也・[illegible]ハ隠る邊[illegible]近ぎ

きてるせうきぬめりそ浮んとする邊りに近づきてるるもの成ん
るもの遠りに近づきてるるもの成ゆく様子と銘ずるもの成ゆく様子と銘ずるもの
て成ゆく様子と銘ずるもの俗言にいふ散間隙ニなる
様子ジヤ隱ル間隙ニ成タ様子ジヤ浮間隙ニなる様子ジヤ成間隙ニ成
タ様子ジヤ然見エルと云意也又ごと同語なる此同詞をかるねぐる
なり かくるぐるなり うきねぐるなり なるねぐるなり と云て金
同じことなれども如ぐし 又今集五 さるのみのもとのもらるねぐ
[illegible] 此のもの部ニいづ
ちなどの今ハ追考の うるねぐること 例の
俗言に 千九様子ジヤ其故ニ なること也此故ニのこと みの一言ニあるて將散
ちもと銘ずる方そべの言ニ含みるもの成相照して なるべきの三ツそ

第十二段

此段ハ下ノ段ノ通リ成古段ハ第三の段クスツムルの言れ活用
ニて変ずるにもあらず品考の例まれと結の格れ足るれと三物ニ活くと
此てこゝにも出されるなり 上の十二段の中ニも なるなり 考の用法
あれどそれとも活きざるもの成なるもの釈とるてわいぶむべし
此段のこゝ いくれ特用ニて間と きくるの 咲と さくるの 行と ゆくるの 敷と しくる
ヨと活ずるもの成 足られ成 有れ 有ル 有レ 有ル 有レ 有ル 有レ

万葉に有字を添て開有行有敷有生有書有引れも同じとすべし

書べし

第十四段

せる　せる　せれ

此せるその活用也為とかせる宿とやどせる残とのこせる貝とふせる

移とうつせる照とてらせると活用しても也為有宿有殘有貝有移有

照有ふれれも同じと書るとの例れ同じ

第十五段

てる　きてる　てれ

此てるつつの活用也立とたてる待とまてる勝とかてる

打とうてる放とはなてるまくのめし立有待有持有勝有打有放有

と書る移上のごとし

第十六段

へる　いつる　へれ　いつれ

此へるふの活用也言とのべる思とおもへる問とたずへる匂とにほへる

逢とあへる習とならへると活用して言有思有問有匂有逢有

習有と書る例移上におなじ

第十七段

める　ちづる　めば　ちづれ

此めるむの活用也沈とちづる染とそめる清ときよめる漱とくちすすぐ

とくちすすぐ萎としぼむと活用して沈有染有清有漱有萎有進有

萎有と書る又こ上と同じ

第十八段

れる　てれる　てれば　てれ

此れるの活用也積とつもれる散とちれる成となれる籠とこもる

勝とかつれる降とふれると活用して即積有散有成有籠有

勝有降有と書ること同じ扨右此中にその結びのれとあること

多くは玉の結ぶ詩奇と生れぬき奇とそなれば、なぶつれき
きくものもれバそこに出てしる況
六帖
うしてうひてきぐわしうるもあつうばまねもそなる結きもれ
栄花玉の飾
うれにしもとうたうたうれバなるぶのみこそおぞだうれ

以上六段クスツフムルの活轉する辞ぞなり

第十九段　ぬ　なりぬ　たるぬ　ぬる　まるぬる　ぬれ　なりぬれ　たるぬれ

此ぬを所謂畢のぬなり往の義也されバまりぬハ成往たるぬハ絶往
きりぬハ知往きぬハ来往べるぬハ惑往也但往といへばなり必ず
他へ往去るものをムるハ非ず雅言に往と云ハ漢文に既往とはぐる往
字は新なり何ものにもれ既ハ成畢遂果もとこて恒なるねも
活く詰せるそなハなんなれば、なるまり、なるやるのれ、ぬをぬき

ぬるまり、ぬるまり、ぬるまり、ぬるまりなるの新、ねを、きれ、まれ、ぬれ、ねれ、ぬるの
の新、皆此ぬの活きるる辞也、されバまんを往んなれば往ばなれば往で
なまりハ往まり、なるやハ往るやの也、又ぬきは往き、ぬるりハ往る
ぬりハ往しぬるりを往るまり、ぬるんハ往んんの也、又ぬきるれハ消往べを
れハ絶往べるれれハ忘往のを也、ぬれハを五段の縛とるすぬぐしハ往べし
ぬまりハ往まり、ぬまりハ往まり、ぬんハ往らん、ぬらしハ往らしの也なる況
ものを知べき也、さて雅言の往往往を今の俗言の来来来のをなり
そをを万葉に春者来去来なるべ来るをもまるを去とるる新のめ一等
のものハ既に蘆荻鈔、又山彦冊子初篇三巻、去されバの除なるべをも又合せ
てもなるべし、大なるを、世の人を、是等の往去の言と、俗言のを心況をる
うるたをもなるべきをば、たゆをなるべるをもなるべるを

とゝぐきをば。そゝぐべうとのべ。そぎぬなるれとゝべきをば。そゝぐ
まゝうゝるとゝひゝゝらぬゝゝにゝゝゝべきをば。くゝるげうゝとゝん。
きねなるとゝべきをば。くゝるゝゝゝるとゝん。あきぬゝとゝべきをば。あゝ
とゝを誤る歟。京にも文ゝも常多うゝ。これ畢竟ハ。此ぬの本義と其
ざるゝゝのひゝゝす也。ゝるとゝわく往とゝるゝ時ゝいゝゝゝる初学ゝ耳ゝ。
右の續きのゝきゝわきちゝゝゝん。狂言を引傷ゝ言をゝゝゝ。
ゝゝゝべし。

後十八
ゝゝゝゝのゝゝゝにゝゝゝゝ

約らふ〜くゝばゆゝしきのあるもの。ゐ吾。さゝ射ハ此畢のねなゝば。もねを右の如く。ゐ〜往とくゝ〜試て。上下の續きゝ叶ひゝゝ女。居る也。又上の不のねなゝば。まねと不と。ゐ〜悔じゝて。其処のうちに叶ひゝゝもれハ居る也。又此二ッのねと受る辞の。大うれ定りとゝゝで。不のねを。第二ッ韵。カサタナハマヤラと。又第四の韵。エケセテネヘメエレとゝもう連きて。第二ッ韵ゝもハ續ゝ。彼〈天の川原ゝ生ぬ物ゆゑ。などの数。いと稀ゝハあれど。こハ見。ネ〉居。ネ〉似等の。動うね詞の。れなる故也。常ゝ〈ちらぬ。〈ちりぬ。〈もよぬ。ゑ〜ミぬなど活く。又畢のねハ。第二の韵。キシチニヒミイリと。又第四の韵。ケ詞の例ゝハ非ず。セテネヘメエレとゝもう續きて。第二の韵ゝもほぐう〈。是又一ッの差なり。其中ゝ。ゝ。第四ッ韵ゝもう續くのゝを。狂がし給らハ。きゞめくなれど。こゝを兩義ゝ亘る処も。既ゝ。えゞめく。ゝ上下のかゝりに叶ふとゝて。定るわざなれハ。却て怪うまう。そもく此ねの用ひざゝハ。ゝゝ世の人ハ。能て得るゝと多うる故ゝかゝうにてゝくゝとゝゝおく也。形お設るゝ。かくまうに事ゝ。ゝくゝると。又ゝゝでやゝゝるゝゝのあるゝゝ。四ゝ安きと。ゐ得ゐくきとにゝりて也。

第三十段

つ　えつ　きつ　つる　えつる　きつる　つれ　えつれ　きつれ

此つゝ。竟の義ゝて。〈つハ見竟。〈きつゝ。聞竟。〈いつゝ。言竟。〈なりいつハ。思竟。〈くゝつゝ。暮竟。〈なりつハ。無在竟のゝ也。此つも。恒ゝつてと活きて。つゝ右ゝ外よも。〈つなりハ。竟なり。〈ほぐしハ。竟べし。〈ほゝんハ。竟らん。〈ほらハ。竟らーのゝ。又てゝ。〈んハ。竟んべ。〈てまハ。竟まし。〈てきハ。竟き。〈てよハ。竟よ。〈てぬゝ。竟ぬ也。ゝて此段のつも。第二の韵と。第四の韵ゝもほぐくゝ。上のねと同じ。又而有。来有。往有。竟有等。何ゝも過去の辞なる中ゝたる。けるゝ。ゝゝ。ゝる。ゝ。ゝ。ゝ

うんなどの辞の類も上段のぬもつ下三十二段うゐるうれまでの同等ぬべし。
けべし。めらん。てらんとゆるにも徒け結辞よりかくりて中段の辞どもの
も受ぬ例なり。ぬるべし。けるべし。ぬるらし。らんるらんと云るも同じ。
んなどは云ざるごとし。らんるらんと云るも同じ。
てらんと云れどる辞とあるなども是もて分づし此等の格と混る時も
いとく初学めきて忍ぶるしきこのなれば先う底河のづけざまよりは
ずゆべきわざ也。世の人も結びと相合るのみをとてもなとおぼえい
るゆなれど結びもあやまるとも何ぞものひづがもあらず辞のづけ
を混るけも本語破まて言とな　ず。ひづがきこれもり重きあじ。
第廿一段　はて　ふるでもそ　差ぐるもそ　ふるでもれ　差ぐるもれ

此段紐鏡玉は緒等に為来得寝経の五ッと一ッ続くれど今八分らて
づく釈を加ふる也但彼書どもて見合せなん時の便是ふて次第を

ゆ八五ッと合せて一段とそなりつ。
はもを為のを也此音義を既上の六段はぞの條上出此段の辞ども八恒耳近
くてぞや何こそ紐結びを誤らぬると世の平言に為と為とのを
を八習もて只為と云べき処とも為と云なれるまにも徒けかりて
も如もれば誤るとて誤るの多うり。そとを文詞ていぐ土佐日記上
をとこもじてはとゆ日記と云ものを女もじて試んとてもる時り門出を
これの道をるらねたくりを。うちめるむんを。ゆの付ぐりまふるでを
よまてうちとを。伊勢物語上。差ぐりとを。ぜうてを。これ上ふ
ぐや何等のてにをはなき故上もるとハいとぞ。を世の人をかゆ時るかり
の所をも。行をるとて誤るの多り。又勿為ハ。そるとを例るるとるれ
とるをそてをもひづがを上段上いくるべしらん等比格と同例るてを

ハそぐし・ハそんとそて・ハそぐし・ハふしんとそて・ハふぐし・ハくんとそて・ハくふんとそて・ハくそず・次セハぐし・ハくんとそて・ハくふんとそて・ハくそず・下三十二段ハぐしもぐて皆此ぐてうなれバ・次々ハ

ハくそず・

く　みちく　かきつく　くる　みちくる　かきつくる　くれ　みちくれ　かきつくれ

此くハ来のくもか行ハ・牙音ハて・ハ効きに・物の變易・人ハ所行・往反等の意あるなり・此六段の齒音ハ動き・又下廿四段ハくれ條ハ引るるなどに・今せて知べし・其中ハ出段の条ハ活く・辞ハ・をはらんハ所行の方ハ・此段のくれ活きをむれと往反ハ方ハ・其大抵ハ来・来来と往往往と往反し合和と・摧碎と・組交と分賦と互ハ反對せる・ハのやきなり・こに来とハ附と・ハの音義・此をもて味ハぐし・さて此くハ平言ハ来とのハ・ハ意・恒ハ・ハるるをハ・ハるるに・奇ハもハ徒のかるるとハ・ハくるとハ・ハ

ハるるなり・

五十五

あきらかにみちびくとかぶ・ハうるとれハうるうるハ・ハるるハ・ハるるハ・ハる

派生るなり。喉音ハ息氣ゼ音也。息氣の物と生育することわり。下ゼ段八段のふせ条と是合ずし。さて此段も平言に得るものハ多くず。もし徒のかヨ

ぬ寝　ぬる寝　ぬれ寝

此なぬ行のまさきハ既て上巻ののの部まつりこの寝ハ伸萎るの義也。されバ寝るもとなりとも。古事記の奇かも伊弉斯那勢なるもの。なるまを即伸の義まてのびなり。なれ音通ひて一也。此段の辞ども例の平言ろをぬとのをそれなるハをねるとえるもの其ま牽まてぬとえべき延とぬるとの誤るもの多うの心まぐきも。

同

ふ　ふる　ふれ

此段のふをを下ゼ八段なるくをを其紐引まとおくの辞ぐるを彼喉音の緩

う。ゆる息素の續き連る方ゼ出て物の續き連る方ゼ法のしつへる也。されバ瓜のふくなるこいひ雷なるとなるふるとえ水などをなるれふるくるなどもくり年月ゼえも行程ゼえる背面を也。彩此をゼ五音合ずて一二いそぐ延。匍匐蛟行。稿間機旗日樋梭血漕の引挽間久経吹船経麻間。程蕃なるものし。此等の中日を出ずるを日を東ゼ出て日々ゼ西ゼ渡ず没るもの坂ゼえ弦。楊樋筥梭血漕等も皆渡ず経をありて其義一ゼ少ゆれバ也。又機を出せるを機を経て織ものて延立の義ゼゆれバ也。又其機物ゼ。ゼえゼ手経ゼて系ゼ縺ゼ延まゼ経て成ものなれバえをゼ西。又船ゼ経根の義ゼて海上ゼ遠く経るものなれバえをゼ。此他何ゼも皆経意ある坂ゼ出ゼつさて此段の辞も。

ゼ十七

みをのこいうふまちうんくふとも。ずぬるくもあくじとをとへバ

かゝるゝふるのみ云べき処をもそ世の人ハふるゝ語るゝあるゝ先七上の例と同じ

第廿三段

に　におるゝ　そゝる　もれ

此もそ姑く但綾などにゝる今のをとゝして八令句ハ云ゝもそハ令知き

もゝ令著八もゝそ令見八なもゝすハ令思八きうすハ令聞かゝるゝんもゝて

の詞ゝもそ可ゝ安きゝ仍ちゝかくゝ其令のもそ為の義也八おかし八

もせなゝゝ云ゝのもせも共ゝ為為のをなるゝて知べしゝて唐の音義八上

の六段ゝその條ゝ出ゝむの音義もそ下廿九段のむの條ゝ出ゝり

第廿三段

る　いゝる　ゝゝる　ゝゝゝ　ゝゝれ　ゝゝれ

せるも但綾ゝゝゝる所のをとゝして八ゝゝもそ所知八ゝゝもそ所言八まるる也

所待きゝゝもそ所聞とはるハ所問ゝもゝらるハ所忘と姑く心得べしゝ但

云言の本もそ例の下三十一段のるの條ゝゝゝるゝどにてゝさゝゝてゝれこハる

彩もそ重複とも嫌ちず甚処々ゝゝゝしゝで出さん方ゝゝむ人のゝゝゝ便りよ

うゝんとゝもゝるゝゝ此書ハゝゝゝかゝゝ本書ハ大意と採出もそのゝゝゝて一紙

もゝゝかゝれとゝのせれハかゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ合せて省くゝゝゝ多ゝゝ也

第廿四段

く　あぐ　たむく　くる　あぐる　たむくる　くれ　あぐれ　たむくれ

此段ゝゝ下三十二段までの九段もそクスツヌフムユルウの言ゝて結ゝる常の辞

ゝゝもなれど結の三轉ゝ分ゝるゝとゝ以ゝてゝゝに出せる也彼上の十三段ゝゝ次六段ハ

辞の新なり

加行ハ音の人ハ作行ゝ関ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

げ〻人は所行又よれる也。就中くれ音うそ。括縛組絎繰綫縊合交分賦執などゝ云に成て来るわゝに多くつゞく。詞の下に附ても。裹被潛頗頗。炊漕拷拔捧置磨殺築挽引纏巻などゝ云し。即物の成就ふと。いでくるゝ八ゝと八ゝくと云て。為なる活多のる。前後も一ゝ出る又合ゝし。かれば〻の舉手向解續懸明等のくも。各まゝとものもるを。おのづゝ明うるゝ。大うの言は義と解んも。先其音と口うつして。かゝゝ唱へ試んゝふれわゝるし。そのもゝなゝば右のくの音一て。括といふ徳と。唱へ試るふ。其の口は形。唇相聚て結りて。即物と括るのわく なり。又徒と云言を唱へ試るふ。其口の形物と衒る状なる。是即其音義也。諸音共に吠でゝ〻て。けゝゝ味くおがゆゞし。昔より信歟せるもゝと又ゝ。きゝくばゝふゞ一ハ掘串也。ほるの又ふ也なゞ。きゝ。物二ツ帶と重りる

語の訳ハ誰もゝ〻ゝ。其抵ハ又いう明る義ゝ。其弗ハ又つうる言ゝと推考対考。得ゝ人ざるもり。ゝもゝ〻ゝて。信訳とゝるのゝハあゝず。何もの語も。單直なる本音より解とゝて。語釋とゝつゞれ。

むの終云。ゝ十九段のぬ。やる。やれ。下才三十二段の。う一一一。うれまで合て十四段。

才三十ゝ段より。才三十八段。クスツフムルの。ゝ段の絆どもも自化のうりゝて。二抵ゝ

ゝる河ゝあり。ゝ例とゝゞ。解ハまゞゝとくるとゝ吠ハ八ゝくゝ。ゝくゝくゝゝ。

て。此十四段の格なるゝと。他と八ゝくとゝ吠ゝくゝとのゝ八ゝて。ゝくゝるゝハゝゝず。

下の六段の格也。碎考。自ゝくゞくゝゝ八ゝくゞゝくゝゝ八ゝくゞくゝる共ゝて。此十四段の格也。他

とゝくゞくゝゝゝ八ゝくゞくゝゝゝゝゝゝゝず。下の六段の格也。折ゝゝゝ。胸かくゝ。

切きゝる。破やゞゝ。なゞゝ同ゞ。此訳ゝるゞゝ八ゝゞしと有。

第廿五段。ゝよす

ゝるゝゝ　ゝれゝゝ

此七も唇のをなることなくて舌の下に附て活くり言の上に置て救滝統飛
次合まぐもつひに下に附てこのく任寄遣痩載失なぐこう此外起立
押指手の孔れ多う上段のくれ活きどもふくそこのあれるもこを行を
歯音なる級に彼牙音と同く唇方の一統あるを言のを改もるもらくあはせ
考ふべし

第廿六段　つ　ソヅ　もつ　る　いづ　もつる　れ　いづれ　もれ

たの行を舌音にて此五音と唱ふそこの動き如撥如押如突如扇るし
又此音にも人の所位立居進退のそこ関る一統あるなり凡この中にて動くものを
彼牙歯と舌の三つなることと牙歯ハもるどく舌を和らう也然こ音の動きも又牙
歯ハもるどく舌の方を一等ゆるやかるなり右の通りのやうし扨上の世段のくり
除と合せてそこを結とうく係らべし此牙歯舌の三つに喉唇の二つと加へ
て五のくそれくに掌る処あり

音の出所言の統と案ずゆうば千言万詞いうに続き動くも筆
ふこそそ任せずこきもあるそのなれ心に味ひたるこハ足
ぬべしそもくこに五躰ありて動きとなす音にも又右の五音有
て動きをなす其繰行も又五等ふして世にあるゆる物の声とうつもそ餘りもせば足ぬこと
もあるこ又其五十の音ども一音毎に活用の統各五統なるがと変
に言霊こそ神の御産と称せるうべこそ足ぬる古書に五十
の二字といの假字に用ひるるもは故也いうなればかく五の数
にこれるこのあらん天地のくじりの時五柱の天津神に天
地の分れそめるる所以きへ思合されしひと足あやしきおもひ
とぞる言語のかぎりもいの動きに随こうへもぐあくきこのうれ
是をいそも皇国の語を五地のものでいそくう私く優れて貴き
所由あるこもと思ひ彼漢人はこのうに理とまるけ音と造りてこもくる
なぐこそ皆私こもにして卑き限りなるうとわのふむべきわざるてあるそて
此つの音とこに附て云ふに突搗急居搏採啄の孔又たの音に拷轉叩
断沸等の孔と合せこ此段の出搾立落等の孔活きのをともちるべ

何ぞ一所に依て進退する出ざるべあらねば
玉の活る玉を玉づくりとなすと云ふ
の六段の格也他とかはるゆへ八つ
ふるとも八つ引とも云て七十四段の格也

第廿七段

ぬ いぬ ぬる いぬる ぬれ いぬれ
ぬも七十九段なる畢のぬるれども玉を玉と緒との二音の法まるなり
ぬを八ぬれ去れなどハ糸の活きまる也八つ八ぬ八つぬれなどぬの法きまる
づめしさをこの詞れ玉を去ハ去往とうづめく本語のをくを出て死ハ去往
の終りて出る也其他も是に准らべし

第廿八段

ふ そよ ふる そよる ふれ そよれ

此ふ経の音也音義を上れ廿一段れ経経経の條に出る畢也
漆戀生調存穀等の緯の中に長経穀経取経をば彼経のをくを誰
に合点ゆくもとゆくの漆戀生るゆへ経のもとをハ耳遠きゆへ
唄音の中時に息吹の氣の物と育増する方れ続り活る緯ども
也凡そ天地の間の物何ぞ息氣に助られて生育せざる物のある人も息氣
の通へばこそ生れ火を吹されハ消水ハ流れられハ死ぬ行も同唄音な
る産活息得生なども云る類の多うことく合せて考へべきなり

玉の活る此中自他に依て活きのうつる玉添る自添ときはいとく物
時を八玉ふ八玉る八玉れと玉るなり玉世の人ハ玉などとも玉て八玉きふと云て
玉ぬ玉ぬ玉ぬ

ま行の音のもの八既て上巻のま部にもれたれどもその辞の一統に就て粗いさぶ唇
も唇音にて此五音を唱るに唇の動く状物と如巻如撮如迴如包な
るもの其詞に巻纏結約親巡回なども又下に附て紡摘撮抓な
ど云類の多きも是皆其唱るに形に随て故なり多し此後の中採抓の
まを諭さば むの音を唱るに上下の唇の相合る形也即て物を採
むけのをつきと回じうは故べさて此辞と活うして縒と云など
そくの音に絲を引きあるを紡ひ也是より何ものにも縅認むるものにも云とそれも皆にの形
ふらんずとろもぬ はたくバ下に附て否拒などハむの音にはと閉てらけ
形貌のあるより出る幅狭なるめむも又是より出る也 山高に月清みな
の活用也 らに出せる頼眺漆留恨覽などのむの音義もこれらに准てさるべし 此辞の中頼漆留恨などハ彼認むる方也眺覽などハ眼の言
也 きて眼をめと云も此同行の見れ活きて眼以ても
るゆと覽などに云類を推 此活用也
ぬ終に皆四段に落りり

むの活に れハみづくりたのむ もそ ひたのむ こそ へたのむ ゆるそ ひたのむ ゆるこそ ゆるそ ゆるこそ 下の六段
れ格也他とたのもるこそ へたのむ もそ へたのむ ゆるこそ ゆるこそ 此十口段の格也 まる
續ぬく へいる 沈 ちづむ ちづむる 漆 なども同じ此類なほ多し 此類なほ多し 此類
て新ぐし 注のへ体の自他のうちめをわきまへべして 類を意のうなと
にみづくり れむと へと形むるとと一つるべしたのむと云て一つるべしと
吹そ たの ゆるくむ ひたのむ ゆるとこそ ハ万葉に今憑と今字
と漆書て へとも れまし むるこそなれバ こそ形むこそハ異なり 又細説
云れハ我 頼 へこそ れ吹そ たのも 此 ハ こそ の絃 こそ の也 こそ
人金我れ こそ 吐ハ ハたのむ たのむ たのむ たのむれと第五

第三十段 ゆる きこゆる ゆれ きこゆれ

ゆ行そ喉音三行の中に最急速にして烈しき音なるもの上巻やの部に

いろ〳〵のゆゑ彼の箭射弓越避等の類又伊行得行而ぎゝの一統
ゆく行遣をの言とかれる也されハ見聞栄消絶等と八ゐゑゆくきこえ
ゆくゑさうゆくたゑゆくと云てもゆえまる思忍ぶと八ゆゆしゆる八ゆび
やゆゝ云とても云ゆゑもきこゆるなり

第廿一段　る　なぐる　もぐる　るれ　なぐられ　もぐられ

四ら行の舌音八彼のた行の舌音とハ異ゐて舌の動きの和ゆかるゆゑ
な行ハ舌音と唱るゆゑ相似ゆゑ八ばの音ハ體言と延傍けゆく
状と同く四ラリルレロし又言の中間下等に附てゆゑの何と傍けゆく
也ゆゑ中ゆゑらとるゆゑゆゑわきて引ゆるゆゑあゆゑ以出せる何ゆゑ流
時雨隠乱焦悴吹折等のるゆて云ゆゑをうゆゑもゐべし也

第廿二段　う　う　う　うる　うれ　うれる

四うの音に息ハう添加る義あゆゑハ上れ廿一段の得條又廿八段のふ條
に出ず其処と又合ゆゑば上れ植居等のゆゑものゆゑゆゑ通ぐし
飢と云也人飢見ばもぐ〳〵息れこけゆゑ故と云也かゆゑ〳〵ゆゑの相先
ぐゆて義をなせゆゑ又恒多ゐ也

二轉部

以上三十二段を上段紐続右行中段紐続中行下段紐鏡左行と名其受辞の三特と
分れゆゑ右のゆゑしゆゑれハ言の切見續きも此段まで八上段を皆切て
但中段八皆続く切ゆゑ也已下十二段を上段それ徒の結と中段そヤ行の結と
一つに混じて下段こそ の結と共二特とゆゑれる故と中段の續く何も切らんを
ゆゑれバ切れも見る也ゆゑ〳〵上の廿四段より三十二段までのクスツフムユ
ルうれ九段と下三十二段より卍三十八段までのクスツフムルの六段とハ共ゐ

第三ウの韵は言どもなるに、いうがる故なる二轉ゐなれるごとく云に、上の九段を段をゆく、ゆくくるレ、トクへ、まうす、マカリ、さレ、ゆうる、クッ、ぬ、ぬるレ、イヌ、ゆうに活きて切て格も續く格も定うに備ハれる故に其結も三格に分れると下六段なる所を、聞と、きくるとも、いうれず、成をへなすると、言をいつるとうれず、見をへるとも、いうれず故に、上段 細綾 右行の格、中段 細綾 中行の格と相兼て二格ともなり、又活きも續くれハ即續き、切はやぐて切るく也、此三格の活き方と二種の細の活き方とは行きて速うに耳こうせんうるゆるくるにはてをたらはそうひうるく又此さうひうゆ、少るゆくの誤なる出くられば、行くく此処本書の釈て就て其くらうと明らうおくぐいわぐなるうし、かくてはもと。

なるく辞の下て置、言ゆうるを。とをつの連音なて、継と旨志也、そはとづるとこいはさきの活れば、引も又切れるる言を受て、自と續活言とはなれるなり、下十段を、續く辭の下、又るなどの下ゆも置、例也、是切れて後きも生活、河も用る故みなである、若それくと忘るくるもして、後く言のもよ、こ置いる例まれなると思混て、既と春海、濱臣等も思混じ、狂此項をる記ごもこれうれきこゆ中段なる、ぬるく等の下とおうば、いくきひぐるなるくでうし。

第廿三段　くきく　ゆく　けきけ　ゆけ

此くの音義ハ上れ廿四段なる、くれ條と出くても言のもの方ハ大うる相同じれハ此段の聞、行、鳴、咲、解、漕、焼、引などとかくての解、續、擧、懸、手向、明の数と其辞のくも互と相似ち、紀るく此等の辞れ、上下二處と出くるハ其

活き状の異なる故なり。其差別そこその受てよくもらる上の題明をば
はこその結をそかくれ、あくれとくらべの外に、れの一言加はるとこゝの聞行は
数をきけ、ゆけとけハくの言に直して、彼段の例はかくこゝにきれとも、ゆく
れともいひぶし。次々六段ともに皆右の定也。此差を以て何段の辞どもを准へ
かいぶむべし。

此末の中、解と続とを自他に依て活きざまの異なるこゝ。既に世段に出。

第廿四段　そ　せ

此そし上の廿五段のそと同じく高みをそれどそ活き状の変るを上の例のみし。
音の本義を上の六段のその除らん。次に処々に出るもの、たゝの残、移、成、偽、交、
宿、散なぐと彼廿五段の任、寄、遣、痩、載、失等の活きと相似ち。

第廿五段　つ　て

此つも上の廿六段けつと同じくて、立居、進退、所作に云活きと活き状に依て再
び出るこゝ也。音義ハ世段けくの除る出るこの立、待、打、勝、持、分、壊、放なぐと
彼廿六段なる立、出、捨、愛、耻、懼、等と合て進退、作行のをとをぐし。
右の中、立と云辞の、両方に出るこゝ自他に依て活きざまれ変なる
故也。既に廿六段に云。

第廿六段　ふ　へ

此ふも上の廿八段のふと同じく、経の義也。これ言、思、逢、習、厭、拂、添、
匂なぐと、彼の戀、添、生、誘、存、数の類と、こゝ言のをハ同じくて、何れも経の
を別こゝ。既に彼段に云べくとこゝ。

第廿七段　む　め

此むも上の廿九段のむと同じ、音義そこゝ。これバこゝの　汲、色、沉、住、悲、涼

忌・楽なぞと彼・頼・眺・除・留・恨・覽等と同じく、むの言の押へ止めをあらう。
合せ考へべし。

四中・頼ハ自他に伝て活きざるべきなり。既に廿九段に出。

れ　れ

第廿八段　る　る

此るも上の三十一段なれども同じく義を除き出さればその見・知・寄・及・契・終・散・積なぞと彼・流・隠・乱・時雨・悴・吹折等で言の活き此のごとくふのみを用ゐきせ。

第廿九段　ん　きうん　めきうめ

此んとむと別なるにあらで、本居翁の説ハ「ん」字の「ん」と死字の音にて古き假字に元・元・ん・なと書き、又奇の自れ首に置て、むうよりえへ、れらさきのえ・えなど活用せしとしるべし。

差あるにあらで只此段より下の「うん」「ん」等の辞の格は等のむとは異なる也。故に此段より下の言は活きのまゝと按ぜば中古は泥まずうんぞ。此段さんぞ、ゆんぞ、来むぞなどいふと同じ。ぞんとこそ「んぞ」「んぞ」云ふの合はる辞どもなり。本ハんとその二言の絡りてその活きとなりしなるべし。そは此段のんの格をゆるやかに解る所にて、ハ、ハ延て

後十拾十八　いづくにまれ　もかくもあれ

新古三　きこゆ　いかくしはくられきこゆあんとも

反ぞうるあつぎて　むのしらあとづきてつきこなるんとも

かくあるも等を多うり是即そのむの本活也さる故にかくまよ

活くむ言の万葉に将字と當て見むと将見　きうんと将聞　いくんと将言

ぜんと将為　ひとんと将思　もくんと将知　ちうと書見　れくと対てきう。

ゐんも・将聞・将言のもと・ゐん・ゐんも・将見・将思のもゐんと知
べし・猶此音義のくすハ下のまゝの除て・委くこゝと見てよ・又こゝその格のかも・
世のかゝるを別すして・此段の格ハ・べれのもあり・文法のうゑにて・えゑと
云も・ゐべれやハのと・きこうやも・ゆべれやハのと・又とゝ云うゑにて・
古十 花のまゝあゝべらめども・ちゝに・ちゝにこのもたゝるはまべれ
万二 いそのうへにはまるあべとたもとゝめど見てべきたゝべあちとゝ云れくゝ
古一 もとも・もゝとも・おもべ・むゝ・ゝゝ・ゝゝめどやゝ・ゝゝ人でゝ・ゝゝ・ゝゝ
四二 まべゝに花のちゝもあり・ちゝめど・ゝゝん・ゝゝのちゝ・ゝゝ
ゝゝ・ゝゝべれのもゝ・ゝゝ・傍に添る・ゝゝ・ゝゝ・ゝゝ・ゝゝ
のゝと・むの・ゝゝ・ゝゝ・ゝゝ・ゝゝ

そそこのへるこんも成（ナル）べ邊らんと共」へ思（オモフ）べ邊らんとて」のを
まぶるて・ぶるでし・

古一
つぐ〜ふうくそそて〜をりれバきそあくぬ雪の。何ユヒニ　そそゆ〜ん
同二
ひくくくれ出くりのぐきをよまのうく。何トテ　そづくくうまくれのちくくん
あの結し吐数と〜ハ　哉のそそ通ようんとてのれ　舞の結びとされとのと結
ひくくくれあるず・そも〜〜うんとて・直づくそくゆと疑へくうは上ようや・
何者の指辞あるて・其辞と結び」又をゆ意ようと統へくうは上て指
辞くくて・一首の中に・何ゆ意て・何てなど含めてうんとそつ也そこに
引る二首も・傷に加へくる絢ぐ・めてゆれべし・うくとうるの考とせるを秋焼
迂遠なるのくるず・さあうう解てを・例のをきう跡くるて・うくをび
の場げくるうゆくうのをや・

トニ
かうぐ〜の。何ようのをやしもうくん」ぐれてくくも人をそそ〜むて
古二
む〜〜〜

此来（キ）経（ヘ）と仰あてあハで経へる女と氣長妹（ケナガキイモ）とゝ旅と久しくあることと氣長旅（ケナガキタビ）
なるべくゝ下のむを。まくのを也。まくを学を大ゝりまゝうて。将（ヒリ）為のを
ゝいゝれど。万葉ゝぐゝを。を去の泊ゝ。ゝんゝ。けゝくゝ。おゝゝゝ。極ゝ
此辞を。を去の方も用ゝ。を去ゝ。ゝの将（ヒリ）有。将（ヒリ）無と其有無虚實の方
ゝ絶て也。されハむも。まくも。共ゝ過去ゝ。未来ゝ。ゝの未ゝ日前ゝ頭
ゝれ来ゝ。ゝげゝゝ。ゝ辞也。絶ゝ昔ゝ。ゝん。を。未来の泊ゝ。ゝの。ウ
も。通ハ。ゝよゝ。ゝゝ。ゝ多ゝ。ゝる。に。其故ゝ。詞。を。絶ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ。
も。いゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ。実ハ。ゝを。ゝ。ゝ。ゝ

程ゆくまで。明んぬ。あんとを。明んぬ。まれて。ゆく。人を
ちゆ。しんなどのめし。此等の中なくんと後く意初学ゝを心ゆくき
て。題ふまして第四の韵は。れ。れ。ゆ。ゆ。ゆ

ひまゝ

ゝゝゝ

きてしぼりてゑぶりにいくる後どもをれば共なりあてのまゝ先てかやゝ曲ら
ぬもの後どもの中にうけべけおぎゝさりぎにやうてまづてのへれあるる
まゝ安き妄説（エセゴト）もきくれるゝ又ゝゝけ的曲りてあるべきうちの
ちりて再跡をもうきて来て人れ承ゐてきるに却て正説（ミサナゴト）のそれゆく
も出きるうゝて せんきべもきのそれそ守部ごゝゝの中にも普通の
説りそつく国学且して再跡げまるのゝ多うれば行きうなんとそなるべ
ちやきげれ道を変ゝ ゝゝを出きそるゝ心ゝそいべうゝて
らひてゝ多きべきゝて彼んうゝの後ゝ後と先ゝつきゝくてん此
ましハ（文語ましやハいとかゝる時ハ切ゝ辞ませばと活らき
ハの格なれども元来ハ續きもそる辞まて）ましのとも続けゝと彼ゝ
ゝゝ辞ゝて うせばとも活うず かゝうべとも続うず うゝとゝ後
ましし是ゝうしハ捻て切ゝ後られば也此等のゝどもとゝたゝでいる後の
いうゝ出ゝゝ弘ちゝん うゝもゝゝうきるゝゝも也かゝてゝゝにおゝの思
ゝきとゝゝりて此言のゝを次ゝ解べし此格ゝゝの結りゝ三巻ごの部ゝ
出せれゝゝ其処ゝ挙んも釈の費あれば如ハきゝうなゝゝ一ゝゝ合せく
ゝゝは出ゝゝゝり

古十五 ゝゝゝ

後拾一
彩足てで分けてきこゆもかたらふぎりのなうこゆまつのバロ
四十五
月のげのいるさしもたくまたみつるは山せまつこゆまつうバロ

此歌を彼とちと二ツ相合せて云ふと一ツにして、そ一ツを結句の下に省き字也。

ちもきれバ上の句を、まハうぎりのなうこゆまつうげ、よこゆまつと省カ足。

次の句ハ、西は山のなうこゆまつうげ、れどこゆまつと省うる也。

後拾十五
山のこれかうまつうげ□池うげこれども月をかくれぎりうる足

これを右の四格と、中間うて省る也。かうまつうげ、れこゆまつと加て、

こゆらくしゝ。

後十一
山ゆ流ゆは也ぐう寺人のあるうせば祈ぞんをもこゆくこゆまつ

彩古八
あるれ人々のゆうとをこゆうせばなうこけのあるもちぎこゆまつ

此歌を、右のまつをませと結ぐて、まつと合せるなり。

古一
学けるうたうたうたうたうたくこゆのうたうせばきのこゆハのぐけうまつ

四五
こゆうぐばのなぐれぎりせばこゆうゆれのけをばれうこゆまつ

これハ右のうせを、省と約めて、まつと合せるなり。

四十五
ゆうれ学けるぐこゆまつと□あふこゆのいとうくうるきをのきうせば

此歌を、上の格を、下うたいこゆる足。

後九
ゆうぐこけうこゆこゆこゆこゆうけうたうたうたうたうたうせばなうこけをとうこゆもせん

古四
をこゆこゆぐしけるうる邪ぐべうやぐうせばあやくこゆぐれをとや立うん

此後撰ゆうを、為者（セバ）と、将為（ムセ）とと合せるう、古今ゆうを、せばと、んの一言を

合せるう、是をゆく此等のむの言ゝんと為け義あるぐ故也。此は等と合せて、

まつ。ませハ本ゆう四段、為者（セバ）、将為（ムセ）も一ツ活用ゆうゆうと知べきなり。さて其

四段どもをうくゆうて合せゆる也。漢文ゆ将字を、おくたと訓（ヨミ）付て、

又云云爲(ナラク セ)んと爲(ス)と同言の爲(ス)と再(ヒ)いふと同じいふぐさまなり彼漢文の訓も古きよみうつしかゝほ古語の盛なりし世に訓(ヨミ)佶べるゞ遠き世に遺りゝる也万葉十八巻長歌に「はるさきらんを妻の子と戯れ遊ぶ春さきもうち欺きかたらひ賜へ」云云又三巻長歌に「はるさかふいくたびの過とおさちぐゞゆゝしきかも人のなりにけるかも」云云などをまくとも「ゝ」しらも通ひ「ゝ」あるまて「ゝ」まく「ゝ」久と云て爲(スル)を為る言の義ハ上の三勝部にはゝ段に云へるゞ如とし「ゝ」まし「ゝ」ませ「ゝ」まさ等図絵れ活用まつ「ゝ」明「ゝ」くれば今はまくを

○まゞ

将字まゝて粒書して諭さば「ゝ」見将爲(ミツノセン)「ゝ」きうち「ゝ」聞将爲(キカツノセン)「ゝ」もまし「ゝ」言将爲(イハツノセン)「ゝ」せまし「ゝ」爲将爲(セツノセン)「ゝ」為(セン)「ゝ」なまし「ゝ」往将爲(イナツノセン)「ゝ」てまし「ゝ」盡将爲(ハテツノセン)「ゝ」思将

はゝ活の人の京こゝろ言ゝ行ゝ少ゝ物ゝ知ゝ人ゝ物ゝ知ゝ人ゝ物ゝ知ゝ人

○まつの

上巻に掲げたるその詩のしたハ過去の辭にて去既の義なるべし既よ
其條にいへるごとくしたまつの前段れ已ハ[illegible]なぞめ
まつと回くて[illegible]在中を[illegible]ハ[illegible]ありせバ[illegible]
悔て云ふこの終也と為の詩に彼去既のそうと一つに擧て[illegible]
[illegible]

赤染集

[illegible]

金四

[illegible]

十四

[illegible]
[illegible]の奇ごとして右のごとなると初ぎき也言のことを上のまつふ對へて
[illegible]

こゝそれ受辭

切迫する下れ指辭

うハ彼の義也ハ甚然なるこゝ[illegible]その通音にて[illegible]
ほゞ也古事記下巻の奇に八[illegible]鳥草樹斯賀斯多迩萬葉十二長歌に
仲枝爾伊加流我懸之己之母乎取久乎不知己之父乎取久乎思良尓
是ニ己字と填しる也其時に指せる物生物なるこゝハあらず なるこゝある此等の斯も
其の言也これハ此辭を毎に云竟て切れる語の下に附る例にて既に上と指
て彼其といふこゝ如く用ひる文法恒多うり奇にも

古四

[illegible]

此部に所々いくつかあり[illegible]
のこと金葉[illegible]きう將為べれの也千載に為べれ乃
[illegible]

千十七 みくまのゝもあゝぶるこゝろあらば
これもみるこゝろの分ぞうし

なかなかに水のこゝろ八これもまた其ソレ
ゝ云ゝつゝけて下ゝ彼其カレソレとを指せる也拾な
ゝを水上を皆神と云ゝかゝれバ神ゝたちのことを指て彼其カレソレとを受ま
ゝ也千載なゝを誰もみるゝと云て彼其カレソレとを指る也大ゝ此等おゝく
ゝなべし特ゝをゝ出ゝ指ゝる係の助けゝ置ゝるのれゝをゝもあれど指ゝを
後拾ゝ十九てゝを皆者のてゝなり又

百十六 はぐゝしのゝ浦と色ゝみくまぐゝをみ山とゝたゝにゝやゝきゝれゝうし
拾に

ゝゝたゝうゝゝゝゝゝきゝてゝ見ゝてゝうし
此ゝゝゝゝゝ

後拾三

きくつるやちとせをふるらん□おくさぎす老ハねざめぞうれうたがる

新千六

もつしぐれふるのゝ山ぶとゝのなるらし□をむくさくやそでのぬるらん

後五

松のねもとのしらぐをさゝせてハ立田ひめこそ秋をひくらし

ゝらしに限りてとゝぞやゝ何こそ這れ何ものの指縛とも受さるを初

せんとてかく二首ばかり引る也さて此等の詞ハ散遣等紙

のをとゝ此くらしを解遣等紙のをとゝ解る也積遣等紙のをとゝ今ね

らを消往遣等紙のをとゝ也其他も是に準じてかくべし さてこの紙と

指遣等と云言のをとゝ牽れて俗言に譯を付をゝ散サウナ解ルサウナ

積ルサウナ消イヌサウナなどゝ云ほどの言もゆゑ也又しらゝ〳〵徒く上の

詞れるゝを省てあらし かくらし などゝあるあり即〳〵あるらし

なるらし かるらしのをとゝ也知るゝ此等を多の結く等のらゝを上の言

離きて二つの詞なるゝとゝしらゝハらハ上の言に附て別るゝといるをひう

ゝをとらゝを上の言に附るゝを非ばらを引通るゝ故にらゝ抜けゝ

をゝ世て上のゝと者ゝを也ゝをらゝのみもあるらんもあるらんとあらん

なるらんとをらん かるらん うらん なるらんなどゝあるも同じゝて居上の何

のゝと者ゝ例ゝるゝものをやゝ又しらゝとらんの活きゝる詞也と和

せるもゝゝなり らんとらゝと各異なるゝ故ゝ古の歌どもを今世て

知くし此等のゝ如ゝをゝと詳く弁へられずとも事をられハ得

しるべし

○そゝらし

玉は緒八千種等に者ゝらゝの約れる詞也といるも例のひう

ゝを也既ゝ上の十一段今ゝの除るのゝるゝめくゝるゝ此ゝ来のをゝ此ゝ

のゝ〻ハ来経の約れるうて。来経まくを。ゝむとゝん。来経らと。ゝ
とゝ。ゝゝらにゝゝいあれ。是と同一ゝゝなりて。決定の辞と。疑の辞と相混
して。ゝんぢゝわゝゝゝなるべきゝあゝるべし。本居翁などの人。言語のゝゝ
ゝゝくゝゝゝゝにまぎれ。ゝゝの多ゝもあやゝくゝゝと又弁ゝゝくのきこゝ
ゝわゝゝゝぶゝゝきゝゝゝ明んゝて此来経のゝゝ。又将 まくハ。過去ゝも未来ゝも。未ダ月前
ゝゝ見留ず。心ゝ極ちざゝ
ゝの上附て。ゝゝとばせ。等の本義のゝゝどもゝ。ゝれも皆上ゝ出らし
のゝゝも。又上なゝゝと一ッなれバゝゝゝゝ省ゝゝ。
ゝに冬照ゝゝゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝ

にくらを散去来経ら。なりくらを尓在来経ら。せ又そその文
辞と。

後拾六
うもめくてらぶれるくしあるれるこやけ池あらけぐりつ是も
新古一
ほのぐとまくらそ戸くきくるくるれびぐ
なぐくみくくそほくるれらしと同じ。

ゐ

つを舌音あて此音を唱るた。物と約め圓むる貌のあるを圓き物を
指て云ふ。二綴なり。こそ彼三部廿六段の言とハ其音の綴異なるなり。そそ露蒼粒礫
圓巴螺子蝌壺頭楊筒なとの類皆圓うるくるを也又旋懸なども
廻る狀。四方明る表あり。かくて圓き物を一々離々なるなり。即て離々な
る物を。ゐくゐくを。又ひくゐぐ。二つ。ぐくゐぐ。又分段。すゐ

くくも。又陽つ。分つ。放つ。壊つ。穿つなどの類も多なり。物と數ふる
に。一つ。二つ。百つ。萬つ。二十。三十。四十。千。叱等のもつ。通音なて同なり也。
なぐそ云なり。又數ふくそあくねど物を指て。天つ。國つ。山つ。海つ。田つ。
畑つなども云。こも彼。ひくらぐれ心ぐくもを言也。かくれば行ふ。表ハ
ふつて。表くれて。なぐつ。てくてくさくるも。弱ふへハふつ。やれ
つ。くくふつ。うきもるつるぐゆくくるを。時の旁と。數へ立て云つぐくくるる
を。紙ぬくぐそ云とれつ。跳き放く。彼物と數ふる狀。つつと云とか
きれもてくるに。即てそ表の含りて。当ゆるなり。
古一
ふぐくくわうるくくれバまうすみくれもくくと立つくくしはく
此言を。岑も立つ。突くも立つと云ぐくとつくと數へとくてゐる
ふつ。そ數へ出くる下く。行とかくて。彩てそくむくくるくと云つ

同五
風ふくばおつるもみちばみきりみちにねる新きくそこうを見こつ
ゝ
世うをちるうぐも花と見えつゝちにぬうげも花と見えつゝみ
じれつゝなどゝ数とかぞへとしるるまでそとゝへてこぶかりるき
くきなとうれと含まつるなり先此数をこれを数へてかぞし
同四
ものごとに秋ぞうれしさをみぢつゝうつろひゆくをうぎかとねもくべ
かくさまくなるつゝと心の徒くべてく通ふつゝと秋せるもわろしてうを
とゝてもちゆるをくゝもあるとぐさをつゝをの言のを義も皆け河の級
をゝも世うくれば世ゝも物上のつゝと四じかをして彼上のをとゝもハつゝの
下ゝ詞を含めゝをゝそ此数を含めぞゝて河どもゝと一首のよゝ皆
ゝ人表せゝも世ゝれバつゝのゝのたゞくゝをはあゝぶ生をも八をうりつゝ式み

どつゝへをゝくへつゝとやうゝゝなる河どもの、今は表こおろなれ上
けてをちりゆくと限りゝをはゝを長くゝよみをせるのみせゝがハなる
為つゝさうゝゝ也此数のつゝも間隙と挙られまでなをゝ
て一ッゝうれべをちり
同上
おゝをゝ山おゝくゝきゝてつゝあふゝゝるの間れゝるゝゝをゝるゝ
後四
うゝめゝきゝもゝがゝるのをゝをうゝとゝをつゝも物るの心うれ
世数をゝ八なゝるゝゝと云ゝ通ゝをつゝとゝのゝくり是も古今なゝるゝを幾度ゝきて
をゝうゝをゝ八をゝふきゝつゝ八なゝるゝゝつゝとゝゝくゝつゝぐゝくをゝつゝとゝゝゝひ絡ゝ
て世ゝをゝるゝの後探ゝるゝを八幾ゝびも恨めゝと思ゝゝうゝをゝと
ゝをつゝ八ほゝゝゝとゝをつゝぶゝゝんゝをゝぐゝくをゝつゝと絡ゝて行ゝるゝを彼ゝ八なゝぐゝを
ゝ絡ゝを書紀万葉等ゝ随字と書ゝて八そのゝくゝのをゝなれバつゝゝとを

元より別なれど、此七字、彼七字、用ひ来たれる故
に、彼者なるべしと云へ、只適相似たりとも、字の
うちに、ひがごとあるもあるべけれど、ある物の釈に、百菜等に、なづけ
云へる、字を書くと、僧とをて、それとこの本つをめぐ、云なれるもて、
つく、俗をも、彼字をそ、世の人は、たとえ云つて書くるはあず、字書
に、作字の注に、忽也、又忽字は注に、在也、元々本々、数起於一とある
を取て書るなれば、そ此を云ふ、ここにあれ、此外、何の字、
れのつくるて、箇様のみあるに、早老たつと時き故也、
悪く本のを、及して、思はるふべきに、そなるでるに、
を、再疎きにあり、ひんもくをるひゆけば、安くもえ
ゆきて、為をはるに、そなるべくまり。

○うる

うい行れて音うは、駁、感、斬、刻、麻、碎、縊、刎、消、焦、亟、殺、芽の、刺
鑿ち、身にうるて、痛きをめあるに、何にもうれ、ひくもむるとば、
うをそくびうれしと云、うれしは、ちゞかあるしの上に、あもど、暑りて、詳くい
歎息の声也、此外うらし、ゆきなどの乾も、準ふべし、即うるの縁も、悲哀れうると同じなり、さ
きば、哉のをとのみもあり、それも君の義あれば、歎息のをと同じ
しと也、そ中に、世に所謂、吹るぐ、のうれなど、新の、昨く用ひるを、
もるもあれど、そそ、そ今のかりて因れるのをるて、うれの縁も、悪
く、嘆息にあるべきをなり、大うれ、をめうれを、吐等にて、うれべ
れば、今を者なり。

古二
待人もこねるのゆるにうぐひすの鳴てをるをりてくるうる

四十三
四十九

[illegible]

[illegible]

右のあくがれ悔しうれ、悲哀にたへ、遣憾まれ、美美にまれ、そのうち
歌集れ方に就て、ろ雅也、此等にてもて、彼くもくに合ていると
は、皆一ツに取て、ゐるべきなり。もし此侵悔、悲哀等は、奇の、心くに
就て、分るば、限りもなうるべしし。

古十九
後十
出くゆうん人をとぐめんら、れきにやるものうたにれもひあうる
わづ少の一山すきき苔うそんちづたまれのとるもこねうる

此古今の奇也、隣の方に、鼻ぶるも、ゐわうナアと欲き、侵奪のうる也。
ゐぶ多洲此絡ても、為ゐうナと歌くてるづ、を欲の言は、ゐ

古十
後十四
赤染集

[illegible]

右の[illegible]ハもて[illegible]ハてゐ盡のをあり。ゐ

[illegible]往のそなあり、そもそも[illegible]過去の何なるか、[illegible]
続くるを対して現在行末をとのまして用ゐたるなるべし。こゝを形容
[illegible]の成盡んを後に、[illegible]越して云故也。今の言葉も、何トゾ此事ノ成
就セン時ニ早ク往カシ、なく云ふるを同じく也。[illegible]昔より[illegible]の細
[illegible]以て、[illegible]の[illegible]と云、新しきなく銀をそゝぐ[illegible]そうちん。
右の八[illegible]れを、八[illegible]ゞ八[illegible]をて[illegible]ゞ[illegible]
[illegible]を、八[illegible]れを、[illegible]
金二
秋[illegible]
[illegible]
清[illegible]
古二十
[illegible]

[illegible]
[illegible]
見盡[illegible]

○加

[illegible]上巻の[illegible]
[illegible]
[illegible]
加の言の[illegible]
[illegible]の一続[illegible]物の髪髭[illegible]
[illegible]
[illegible]

指鹿愛辭集用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

を統し詞也。蓋のけも。右のけもて。けをもて附まは。慥歟と云ことなり。
即疑を例ふ。を世の言にも。宣ふ。推きはもて。望へば。慥
歟。其は幾ツアラン。など常云ものり。是と以て推す。熟多志と云後も。歟慥
の義なり。未タ極ざるを。推量して云詞也。万葉などに用ふること也。
蓋字義なるべく恢へり。先ッこれ。わるくて。うの言のことは。もとなくて
大うこれ言の主を。ものして叶も。やを。よりも。疑と。いづる。絮。うは。わるて
あるべく。疑と。辞を。疑と。やを。万に。海ると。ものを。あり。や。ば。や。ば。ぬ。
や。ば。きこゆ。やと。なり。て。あ。や。ば。なるや。思ひ。ば。きこゆ。ば。やなどを
いそぐ。うは。あこう。ば。なきこう。ば。こゆ。そう。まこゆ。そうとなり。て。あり。う。
なーう。ば。こゆ。ば。きこゆ。うなどを。いそぐ。是。此。辞どの本義と。それも
わるなどなり也。まれば。ちうと。ちうと。ちうと。そうとなる。

などはなどなりまれも。元はもちるれんう。ば。ちるるんう。ば。そきく
ん。うとなりまも。ちり。百葉もの。古風のまは。他う。続けるもで。多
うりの。人。ばるあと。うきく。ば。ちうるるなどを。右の慥歟
ちるるとなどを。合せくのれどし。是等のまを。ものみるもく
実ものしまもまれば。ちるるもの。なよのもを。置く。
ばはもでれもれき人のものの。秋はうぜとよろん
などもまれば。ものれども。ものもまの。海もやどりとも。ものうへて。
時れ。ちう。ぬ。ぬ。ば。ぬ。ば。ぬ。ば

たづねてとをやとをたをんひせ。この八右のごとく。なんぢうこんへれぢうと
ありとをに。何をを殺をも。殺をの言の下る切き。やハきををやうと。神
ををやれををに銀の玉れをの。置をて下るけざるも。そをめをいるをき
あをづ故也。ふ通に。歌島のをけやを。へ。うをや。なををやなど置をうあ
をを渡じて。初多の所どの人をを。ふく書を結れり。よのををを。二
なをんをををるをれ。

拾十一
いのちをだあををのををっきをしうどわれやうあるよあるれぢをん

後拾十一
あををををうをりををふるる。をををををくるるをのけるを江のなる
をの殺ををををのうとやをんのをを。結びと書をふ結びををいる。
ををを巻の。ぞ。何をを。いづをの縁のををもある例をを。一きん愛を即て
下へ流をうををを。拾ををなるかををうきをしと愛を。ぷへ結け。後

古十五
夕をれバ人をきをををををけををををををををををををををををををををををを。

円二
をををををのをををなををををををををををををををををををを

四五
秋のすゑ
四十三
をやこ
うゑ
ちゝ
ゆ
ゆ

返しのうた

けう
部
古十七
後十八
古二
四十二

四二十
ぶ
そ
と
う
ま
ま
ま

[illegible]れば、[illegible]ぞ者きつ。

[illegible]ぶ

古七

[illegible]花ちらひくもれなるのこむとふるまるごとぶ

四二十

[illegible]くのあるものゐれ人て人とえるごふらごーせく

世等のごぶを百等に八[illegible]うつぐ兼きてえる兼ちくるごねと

同言てみそれの時うとも[illegible]ねにの二言の絡れるまて

兼尓のをなごぶ兼とそ八むこうれ后うれるごえうれて兼てそ

儲ゑ[illegible]くをの言なれば世の言に其為尓とも文を用意尓るど

云譯[illegible]てちあ[illegible]てをとをるそあ[illegible]ぶ鳴並尓なをこ[illegible]なぐまる

紫[illegible]ちなの[illegible]ちのおの[illegible]也さて[illegible]ぶ八うぐき給

うをとれば[illegible]ちとうやをん[illegible]なをとうやをの[illegible]をかをのをを

變格

[illegible]の[illegible]ゑ變格とをうをと本書本義考に[illegible]詳八弁ゑれゑれと其

雖長られば[illegible]ぶ[illegible]大なれと採くべ[illegible]を時ゑ出

ぜゑ[illegible]ゑ[illegible]の下ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]

ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]

[illegible]八代集は中古のもの、つづく二十首は[illegible]
是[illegible]
[illegible]二十方なるべくて、[illegible]
[illegible]三格の格[illegible]
[illegible]言辞と者[illegible]
[illegible]なるべし。[illegible]
[illegible]
[illegible]

いくとしひさしかるべし。次に引へ八重まきれる。いくよ経ぬらん。いづくまで
きわまるべきぞ。疑とくるを切て言て結びてるそれと思ひよなる
ことやさらばそ鎖の鎖とうれて級ていなるとハ結ぶでとえ
て。そなたどの二首のうち。なふと続てるを略く故昌のをれ
ハいと重うるうち。重き方を奪ひて結ぶのちとを故きと
きこうせんとてのわざぐりて。もも此あるものうちれて弁財
せ。ひねもすしらべ姑く右のかゞのの。繕て加くるを上としてとど
考へてく。

○やまのかれる

後十
ちくでのりのるのねもあるものとはるふるのうちのなやなるのかるる
拾十七
梅をうれまるうしとてはくるのをるつけるきうれやるるる。

此等の結こ「やはるうりとあるを」として撰集を世の人はを
うらうを加へて。ほ歌を改てるるちなどいられど。上の変格の条ニハ。
し。四ニハ又。い。く場ノ物ニ云なせる。前後齟齬して。亨りか
ふしぎて撰集ハ。をらしうと加ふとは。撰者達と指せるふう。義さら
ばをもの撰者をてをを改の定まさま。知ぬもの小云なせるこうて。
いとはやをぎ又後こは人のを指ることうれてとても。物撰は
集を。誰ら私と他う改り直を人あらうんうくれば撰者を指ていへ
る也。ちの撰者いる人ニ。てをを左ちらでやまれるるべあるべ
き。をはるるる

[illegible]の格と称用[illegible]べき也。さるに准へて、右の外、それぞれうきなる
の類とも、あるべきなれども、それぞれ[illegible]

○[illegible]

後撰
[illegible]

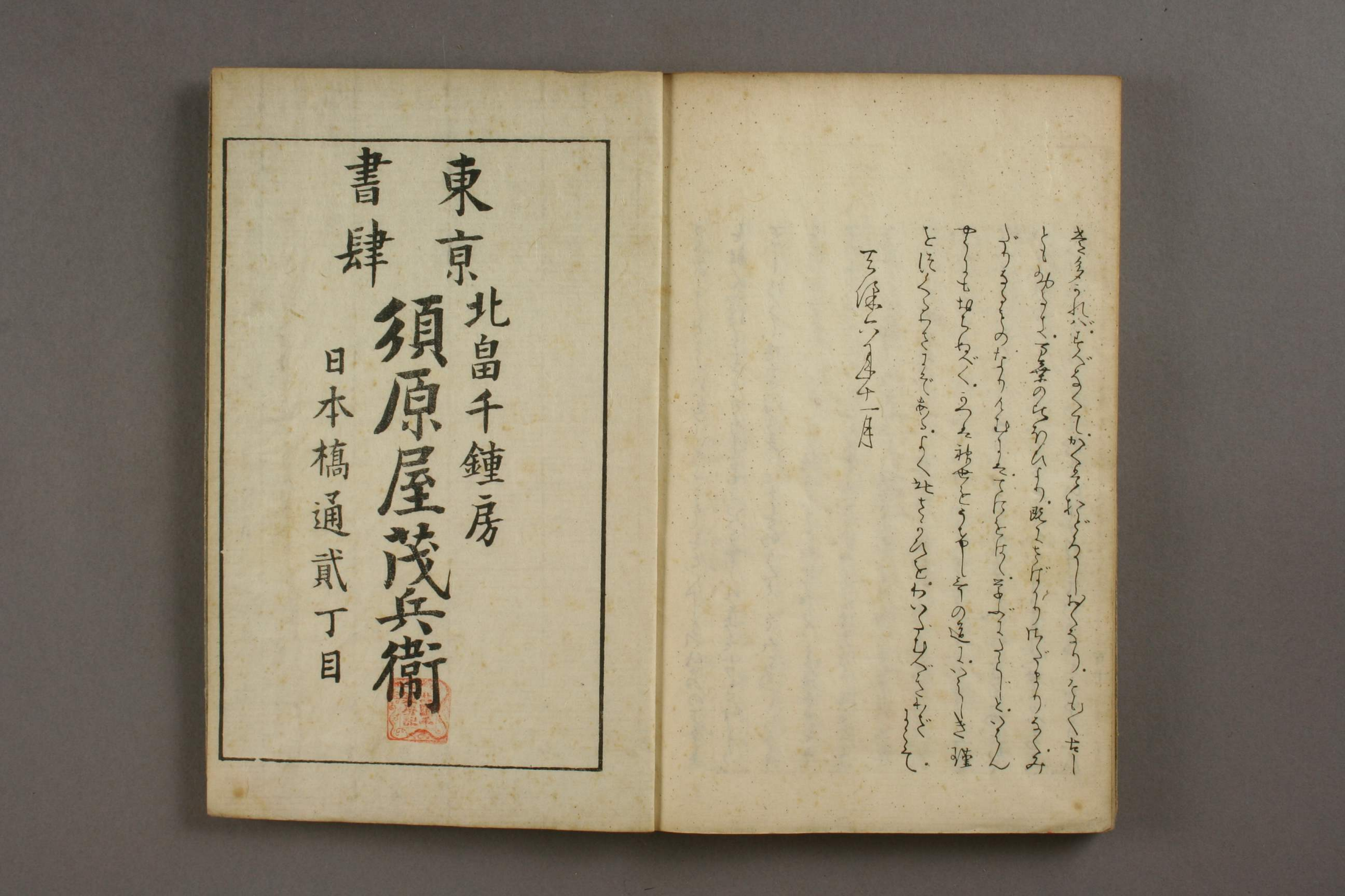
拾遺
[illegible]

此類も、[illegible]やと、問ひ行くなれば、第[illegible]と
あるべきも、出仕日記に、わづか髮とゝもとゝのべの[illegible]波とゝ[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

なほもあまりぞ。そは伝聞の説、ことごとしくもあるべし。されど、ものの道、ことごとしくもあるべし。されど、ものの道、ことごとしくもあるべし。されど、ものの道



序

東京北畠千鍾房
書肆 須原屋茂兵衛
日本橋通貳丁目